The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞David Lapoujade, Puissances du temps : Versions de Bergson
Author(s)	増永, 乃璃
Citation	共生学ジャーナル. 2023, 7, p. 287-294
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90825
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

David Lapoujade
Puissances du temps :Versions de Bergson
Les Éditions de Minuit、2010 年、105 頁

増永 乃璃*

1. はじめに

Puissances du temps は、フランスの哲学者ダヴィット・ラプジャード（1964-）によって書かれたアンリ・ベルクソンの研究書である。著者のラプジャードは、現在パリ第一大学パンテオン＝ソルボンヌで講師をしており、主にウィリアム・ジェームズを中心としたプラグマティズム研究をおこなっている。一方で、ジル・ドゥルーズの死後出版された『無人島』『狂人の二つの体制』『書簡とその他のテクスト』の編者をつとめており、ドゥルーズの晩年の弟子であったことでも知られている(1)。日本では、『ドゥルーズ 常軌を逸脱する運動』（2015）、『ちいさな生存の美学』（2022）などの翻訳書が出版されており、近年注目を集めている哲学者の一人といえるだろう。

本書の特徴は、二次的で、解説書では軽視される「曖昧な数」、「共感」、「生への執着」という概念に着目し、今あるベルクソニズムとは異なるベルクソニズムを示そうとした点にある。ラプジャードは、ベルクソンにしばしば向けられる「「エラン・ヴィタル」という抽象的かつ不明瞭なエネルギーによって問題を強引に解決している」という批判に対して、「アフェクト（affect）」(2)をキーワードとしながら、上記の 3 つの概念の検討をつうじて応答している。

本書は、序論と結びのほか、3 章で構成されている。第 1 章では「曖昧な数」について、第 2 章では「共感」について、第 3 章では「生への執着」について論じられている。以下では各章の内容を概観した後、「エネルギーの蓄積と爆発」という視点から本書の議論を紹介する。

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系博士前期課程 ;u354119a@ecs.osaka-u.ac.jp

2. 本書の概要

第 1 章「持続という曖昧な数 数学者ベルクソン」では、表層の自我と深層の自我との関係性や自由の問題について、『意識に直接与えられたものについての試論』（以下、『試論』と略記）を中心に論じられている。質的多様体によって構成された深層の自我はどうして表層にあがってくることができるのかという問いを立てた後で、「ベルクソンが使用する方法」と「ベルクソンが数に与える地位」についてライプニッツと比較しながら検討し、問いに応答している。ラプジャードいわく、微分には「科学的な使い方」と「形而上学的な使い方」がある。前者でもちいられる数は「明晰な観念」であるが、後者でもちいられる数は「曖昧な観念」である。明晰な観念である数は相互外在的で数え上げることができるが、曖昧な観念である数は相互浸透しており潜在的にしか数え上げることができない。数的多様体という時の多様さは、明晰な観念である数によって担保されるが、質的多様体という時の多様さは、曖昧な観念である数によって担保される。このように微分と数を二種類にわけた後に、自由の（形而上学的な使い方での）微分的要素を構成しているものとして情動（émotion）をあげ、情動の積分として深層の自我は構成されているとする。そのような情動の全体は、社会で生きるために必要な習慣的で機械的な行動によって常に抑圧されており、抑圧されるごとに深層に蓄積されている。ある瞬間において、深層の自我は表層へとあがってきて「反抗」し、爆発する。深層の自我は、爆発の時を待っていたために強大な力を持っており、表層へとあがってくることが可能になる。

第 2 章「直観と共感 パースペクティヴ主義者ベルクソン」では、直観と共感の相違点や共感の方法論的な意義について、『物質と記憶』を中心に論じられている。ベルクソンが著作の中でもちいる「共感」という語は、「直観」の心理学的な表現として回収されてしまいがちである。だが、ラプジャードは、「共感」は「直観」とは別の方法論的な意義を持つものであるとする。直観とは、「私たちのうちにある他者（物質的なもの、生命的なもの、社会的なもの）と接触する手段となるもの」である。この意味で、直観は「自己に対する自己の関係」にとどまる（p.69）[(3)]。つまり、直観だけでは自己に閉じこもったままであり、実在の「内的な」把握をおこなうことができな

い。そこで、共感が必要となる。共感とは、ある他者と関係し、他者の内部に私たちの内部性を投射するものである。共感は、「ある他者のうちで、ひとつの方向、意図、意識を見つけだす」（ibid.）。直観とは、自らの底にある他性を見ることである。そこで他性を見出すからこそ、他者に共感することができる。そして、他者に共感することで、他者のうちに「ひとつの方向、意図、意識」を見出すこと、つまり他者の実在を内的に把握することが可能になるのだ。

第 3 章「生への執着 文明の医師ベルクソン」では、「生への注意」と「生への執着」の相違点やベルクソンにおける正常と病理(4)について『道徳と宗教の二源泉』（以下、『二源泉』と略記）を中心に論じられている。『二源泉』において登場する「生への執着」という概念は、『物質と記憶』以降何度か著作に登場する「生への注意」という概念の「単なるヴァリアントないしは延長」（p.78）だと考えられ、ほとんど研究されてこなかった。しかし、ラプジャードはこの 2 つの概念は全く異なるものだと指摘する。「生への注意」とは、外的世界からの要求に適応する能力である。生への注意があることで、衝動的な行動の人にも観想的な夢想の人にも陥らず、目下の状況を適切に把握し、必要な記憶イマージュを取り出し、身体の運動へとつなぐことができる。それが、「知性の平衡」が保たれた状態である。この水準において、知性の平衡がとれた人間が正常とされる。他方で、平衡が断裂した人間は、現実との結びつきが弱まり心的病理に陥ってしまう。だが、生物全体の水準で見れば、知性的存在である人間はそもそも「病める種」であるといえる。なぜなら、人間は「生命の抑鬱」によって物質的要求に対して最大限適応しており、その意味で「生への不注意」をもたざるをえないからだ。知性の平衡がとれた正常な状態は、この水準では「生命の真なる欠損」と捉えられる。ラプジャードは、「この欠損をどう埋めるのか」、「この不均衡の平衡をどうとるのか」が『二源泉』における中心問題であると指摘し、その応答として「生への執着」があるとする。「生への執着」には、服従、信仰、創造という 3 つの形態が存在し、前者 2 つは閉じた社会のものであるが、創造だけが開いた社会へとつながる力を持つものである。

3. エネルギーの蓄積と爆発

本書において、従来のベルクソニズムとは異なるベルクソニズムを立ち上げる試みがなされていることは、すでにのべたとおりである。実際に、本書からはさまざまなベルクソニズムを読み取ることが可能であるが、本節では特に「エネルギーの蓄積と爆発」というモチーフを取り上げたい。なぜなら、ラプジャードは、このモチーフをもちいることによって、「持続」や「エラン・ヴィタル」といったベルクソン独自の用語で語られるエネルギーの内実を明らかにしており、本書の中でも極めて重要な論点であるからだ。

ラプジャードは、「エネルギーの蓄積と爆発」というモチーフを、『創造的進化』における「植物は太陽エネルギーを蓄積し、動物はそのエネルギーを運動によって爆発させる」というエランの植物と動物への分割の議論から引き出してくる（cf. Bergson 1998:117-118）。そして、このモチーフを、『試論』における自由の問題、『物質と記憶』における記憶（過去）の問題、『二源泉』における閉じた社会と開いた社会の問題に適用する。本節では、自由の問題と閉じた社会と開いた社会の問題について確認していく。

まずは、自由の問題について、「エネルギーの蓄積と爆発」という視点から見てみよう。本書では、序論、第 1 章で論じられている内容である。よく知られているように、ベルクソンにおける自由とは、「みずからの人格全体の表現」のことである。ラプジャードは、「みずからの人格全体の表現」を深層の自我が表層の自我を突き破ることと言い換える。表層の自我は、習慣化された動きによって半ば反射に似た形で行為する。このように凝り固まった表層の自我を、全人格的な深層の自我が突き破ること、それが自由な行為なのである。では、どうして深層の自我は表層の自我を突き破れるほどの力を持っているのだろうか。ラプジャードは、「もろもろの情動の蓄積」があるからだと回答する。

情動とは、「各々の経験に固有の全体性、「ニュアンス」を保証する」（p.43）ものである。私たちの経験は、場所、音、匂い、共にいた人、気分や体調などのあらゆる要素が混ざり合うことで独特の「ニュアンス」をおびている。だが、情動は、私たちが社会的生を生きる上で抑圧されてしまう。社会的生を生きることとは、事物を分割して有用な部分だけを知覚し適切な行為を

返すことであるために、あらゆる要素の積分からうまれる情動は表現されないのだ。抑圧された情動は、深層の自我に蓄積されていく。幾千幾万もの情動が蓄積された深層の自我は強いエネルギーを持ち、ある瞬間に深層から表層へとあがってきて、表層の自我を突き破り、自身を表現する。これが、自由の問題におけるエネルギーの蓄積と爆発である。

本書第 1 章でなされる「曖昧な数」の議論は、「蓄積」を語るための議論であるともいえる。先にのべたように、深層の自我は質的多様体として構成されている。質的多様体というと、質はあるが数はないと捉えられがちである。複数のものの集積ではなく、分割不可能な単一体であると考えられているわけだ。しかし、そう考えられているうちは、なぜ深層の自我が表層の自我を突き破るほどのエネルギーを持つのかが理解できない。実際には、質的多様体にも「数」が存在しており、分割してしまえば本性が変わってしまうものの分割可能なものである。つまり、質的多様体としての深層の自我は異質な複数のものから成り立っているということである。「曖昧な数」という概念を導入することによって、質的多様体が単一のものではなく複数のものから成立している可能性を引き出すことができ、そこから無限小の情動の「蓄積」という話につなげることができるのだ(5)。

次に、閉じた社会と開いた社会の問題について、「エネルギーの蓄積と爆発」というモチーフから見てみよう。本書では、第 3 章で論じられている内容である。自由の問題の例からわかるように、エネルギーが蓄積されるためにはまず抑圧が必要である。ここでは、知性による生命の抑圧がある。知性的存在である人間は、知性的であるがゆえに生命を抑圧することで世界に最大限適応して生きている。『創造的進化』によれば、知性とは「無機的な道具を製作し用いる能力」（Bergson 1998:141）である。そして、知性が明晰に表象できるのは、動的で流動的な生命の実在ではなく、静的で停止した無機質な固体だけである（Bergson 1998:152-156）。生命的なものを非連続的で不動な物質として扱うことで、それらを再構成し有用な道具を製作することが可能になる。製作を目指し製作によって世界へと適応する知性あるいは知性的存在である人間は、生命的なものを抑圧し無機的なものとして扱う必要がある。この生命の「窒息」によって、エネルギーは蓄積されていく。

エネルギーの爆発について語る前に、生命の窒息あるいは欠損が『二源泉』では具体的にどのような事象として描かれているのかを確認しておこう。

知性を「生命の欠損」として捉える場合、それらは「解体」、「抑鬱」、「意気阻喪」の三対の力を特徴とする。解体とは、個人的利害の表象による人間同士の絆の解体のことである。抑鬱とは、死の不可避性の表象によるエラン・ヴィタルの衰弱のことである。意気阻喪とは、予測不可能なものの空隙の表象による人間の行動への力能の意気阻喪のことである。

そして、これらの生命の欠損を埋めるものとして「生への執着」という概念が提示される。「生への執着」には 3 つの形態があり、それは「服従」、「信仰」、「創造」である。服従とは、家族、国家、祖国などの社会集団への服従のことであり、社会集団に入ることで人々は他者との絆を回復する。それにより、解体とのバランスをとり平衡を保つ。信仰とは、宗教の信仰ないし仮構の信仰のことであり、「信じる」という行為のことである。知性は、死の不可避性や予測不可能な余白といった「現実」を表象する。人々は、それらを錯乱させるような「非現実」的な仮構を信じることによって平衡を保つことができる。服従と信仰という 2 つの「生への執着」は、「生命の欠損」を埋め合わせる手立てであり、知性の内部にとどまった閉じたものである。服従と信仰は、知性に対抗するための知性的な営みなのである。

一方で、創造だけはそれらと異なっている。創造という「生への執着」の形態は、「事物からの解脱」を示しており、事物の要求に自らを適応させる知性の働きの外へ出ていく運動のことである。創造は、「生命の欠損」を埋め合わせるのではなく、生命の流れそのものに一挙に戻ることで「生命の欠損」をそもそもなかったことにする。ここにエネルギーの爆発がある。抑圧されていた生命が、知性の働きによってつくられた閉じた社会のシステムを突き破り噴出することで、開いた社会は実現されるのだ。

以上のように、ラプジャードは、「エネルギーの蓄積と爆発」というモチーフを、ベルクソンの最初の主著である『試論』と最後の主著である『二源泉』の両方に適用して説明することで、このモチーフがベルクソンの哲学に一貫して存在していることを示している。また、知性をもちいて外的世界の要求に適応するといった一見「平衡のとれた」状態に情動や生命の抑圧を見ることによって、「持続」や「エラン・ヴィタル」といったベルクソン独自の用語で語られるエネルギーの内実を明らかにしている。これまでに、「エネルギーの蓄積と爆発」といった視点からベルクソンの哲学を解釈した研究は少なく、そのラインを提示した本書は評価に値するものである。

4. おわりに

本稿では、ラプジャードが示した新たなベルクソニズムの一例として「エネルギーの蓄積と爆発」というモチーフに焦点を当て、本書の紹介をおこなった。「エネルギーの蓄積と爆発」というモチーフは、ベルクソンの四大主著すべてを貫くものである。

たしかに、四大主著すべてからこのモチーフを引き出す手続きの中で、解釈に強引さを感じる部分もある。たとえば、「知性」概念の扱いについてだ。ベルクソンにおける「知性」の内実やその位置づけは、四大主著のいずれにおいても異なっているのだが、ラプジャードはその差の検討をおこなわないまま「知性」という語を単一の意味で使用しているようにおもえる。この点にかんしては、今後詳細な検討が必要であろう。

だがやはり、四大主著すべてを貫く具体的なモチーフを引き出しているという点で、本書は意義深いものである。さまざまなテーマで書かれており執筆された時期も離れている四大主著すべてを体系的に貫くことは難しく、従来の概説書では「持続」や「直観」などの概念を広い意味でもちいることで強引にまとめあげるものが多かった。そのような中で、ラプジャードは一つの筋をベルクソンの哲学に見出している。

本書では、「エネルギーの蓄積と爆発」というモチーフの他にも、新たなベルクソニズムを見出すことができる潜勢力に満ちあふれた議論がなされている。ベルクソンの死後 80 年以上がたち、ベルクソンの哲学にはさまざまな注釈が加えられてきたが、本書を読解することをつうじて、また新たなベルクソニズムに出会えることだろう。

注

(1) 本書においても、ドゥルーズの著作からの引用が随所でなされており、ドゥルーズからの影響を強く受けていることがうかがえる。

(2) affect は「情動」と訳出することも可能であるが、のちに出てくる émotion と区別するために、本稿では affect の訳語をそのまま「アフェクト」としている。ラプジャードは、本文中で「このように、情動（émotion）、共感、執着は、ベルクソンのアフェクト（affect）についての思想の 3 つの側面を構成している」（p.24）と述べており、affect の下位区分のひとつとして émotion という語を用いている。

(3) *Puissances du temps* から引用する場合には丸括弧内に頁数を示す。
(4) 第 3 章は初出時には、「ベルクソンにおける正常と病理」という題目で出版されていた。
(5) 持続を単なる時間の捉えなおしではなく、内部構造を持ち複数性があるものとして解釈するこの議論は、現在のベルクソン研究にも大きな影響を与えている。最近の研究では、平井（2022）において示されるマルチ時間スケールの議論にもつながるものである。

参照文献

Bergson, Henri. 1998. *L'évolution créatrice*. Paris: Presses Universitaires de France.
平井 靖史 2022『世界は時間でできている: ベルクソン時間哲学入門』青土社。